
巻頭言

人生100年時代といわれ、2007年に日本で生まれた子どもの半数が107歳より長く生きる。となると、日本は健康寿命が世界一の長寿社会を迎える。そこで今回、“エイジングとアンチエイジング”を増刊号のテーマに取り上げた。日本老年医学会では、高齢者になって筋力や活力が衰えた虚弱段階を“フレイル”と名付け、予防に取り組む提言をまとめた。高齢になり筋力が衰える現象は“サルコペニア”であり、さらに生活機能が全般的に低くなると“フレイル”となる。これまで老化現象として見過ごされてきたが、統一した名称を作り医療や介護の現場の意識改革を目指すという。

2017年1月、日本老年医学会では高齢者の新定義を作成した。これによると、65～74歳までは準高齢者であり高齢者の枠から外している。その根拠は、10年前に比して通常の歩行速度や体力測定結果が男女とも11歳も若返っている。そして、75～89歳までを高齢者とし90歳以上を超高齢者と区分している。われわれ医師は、健康で意欲と能力がある限り働き続けることができる。患者の悩みに傾聴し、ときとして共感する。考えられる診断名、治療法や生活指導を話し、できる限り患者の満足度を上げる診療を目指す。患者と会話が弾めば、日々の診療も楽しくなる。講演会や学会において、普段疑問に思っていることや最新の医学に耳を傾けながら、“生涯現役”をモットーに自分らしく診療できれば老化予防に繋がる。

増刊号の症例は、高齢者の皮膚病を従来の掲載号から抽出したが、好発年齢が中高年層の疾患を選択し、高齢偶発例は除いている。皮膚の老化は、遺伝的に規定された自然（内因性）老化と紫外線曝露や喫煙など環境因子が関与する外因性老化がある。加えて、高齢者の慢性皮膚機能不全／脆弱症候群に対してデルマトポローシスという概念がある。光老化のアップデートを牧野輝彦先生に、デルマトポローシスを種井良二先生に解説していただいた。

日々の診療をしていると、ときとして中高年の女性から皺、シミやたるみなどアンチエイジング治療を相談されることがある。内服・外用治療に始まり、光治療やレーザー治療といった美容皮膚科は大きな需要があり、今後ますます発展する分野である。これらに造詣が深い山下理絵先生や船坂陽子先生、そして再生医療を応用したアンチエイジングは田中里佳先生、美容医学の方向性は山田秀和先生に解説をいただいた。今年初めに複数の民放番組が取り上げた、ニコチンアミド・モノヌクレチド（NMN）は老化を抑えるサプリとして注目されている。人体への効果は臨床試験が進行中だが、2020年以降海外からの原料輸入が本格化し、通販サイトで大幅に売られ、世界市場は今後300億円とも試算されている。老化を食い止め、いつまでも若々しく美しくいたいと願う時代が到来している。

向井秀樹